

特集3-2

金融経済教育の実践例（消費者教育実践事例集）



将来の家計管理をシミュレーションし、お金の大切さや理想の生活を考える



松本 咲子 Matsumoto Sakiko

長久手市立南中学校 家庭科教諭

家庭科教諭として20年間、愛知県内の中学校で勤務。2023年、第20回金融教育に関する実践報告コンクール（金融広報中央委員会）において優秀賞を受賞

はじめに

明治時代から約140年間続いていた「20歳成年」が民法改正により、2022年4月1日から18歳に引き下げられました。しかし、責任感や消費者としての意識が成人になって急に高まるわけではありません。

複雑なキャッシュレスによる支払い、ローンのしくみ、インターネットによる契約など、実際の生活で経験しながら理解することが多いですが、知識や経験が乏しい若い世代が消費者トラブルにあっていいることを考えると、義務教育の段階から消費生活についての正しい知識と判断力を身に付けることが必要です。

中学校の実態

収支を親に頼っている中学生にとって、直接的な支払いは小遣い程度であり、複雑な消費のしくみや将来の自分の消費生活をイメージしにくく、事前アンケートにおいても、「将来理想の消費生活ができていると思いますか」との問いに、「わからない」と答えた生徒が全体の3分の1以上いました。

しかし、中学校技術・家庭科（家庭分野）で学ぶ「消費生活・環境」に関する単元の授業時数は3年間で約6時間と少なく、語句や制度を知識として理解していただくだけの授業となってしまう傾向があります。被服分野や食物分野のように実習や体験活動を取り入れることが難しく、課題の解決や創造しようとする実践的な活動にまで至らないことが現状です。

授業のねらいと工夫

そこで、私は次の点を実践方針として、授業を構成しました。実践した学年は3年生です。

- 時事と関連させながら学習課題を提示したり、シミュレーション活動をしたりすることで、将来の消費生活を想像しながら思考力と判断力を身に付ける。
- 時間数の確保と多角的な考え方で課題を解決するために他教科と連携し、得た知識を活用しながら理解を深める。
- 修学旅行の小遣い計画と買い物による契約で実践力を身に付ける。
- 現在及び将来のよりよい消費生活を創造する生徒に必要な知識、判断力、解決力を身に付ける。

本稿では、実践した授業から、「家計管理シミュレーション」と「修学旅行での金銭管理」についてを紹介します。

実践内容

(1) 家計管理シミュレーション

直前の家庭科の授業で、成年年齢が引き下げられたこと、それによって18歳でできること、できないことを確認しました。「成人でも知識が乏しい」「契約できることが増えるがトラブルも増えそう」「責任が重くなる」と、成人になることを不安と感じた生徒が約6割いました。

そして、契約のしくみや契約によって生じる責任や権利、未成年者取消権についての知識を深めた後、将来の生活をシミュレーションする

授業を行いました。事前アンケートで将来の消費生活で家計をイメージできないと回答した生徒の意見をスクリーンに投影すると、うなづく生徒の姿がみられました。今日の目的として「将来の家計管理シミュレーションをしよう」をスクリーンに映すと「楽しそう」という声が聞こえました。

始めに、食費、住居費など、お金をかけたい項目や節約したい項目を記録しました。1カ月の希望預貯金額の項目では、「何で預貯金が必要なの?」「預貯金ってどのくらいが普通?」などの疑問の声が聞こえました。社会(公民)の教科書に記載されているそれぞれの支出項目の平均支出額と自分の理想の生活を合わせながら、タブレット端末に1カ月の支出の予定金額を入力しました(写真)。雑費、生命保険、自動車については説明してから金額を入力しました。非消費支出の金額を伝えると、「税金高い」「社会保険料って何?」「(支出が)40万超えた」と、一斉に疑問や自分の気持ちを表現し始めました。収入は2020年の平均年収である433万円から、1カ月30万円+賞与で設定しました。ほとんどの生徒が預貯金できず、収入と支出の差額にマイナスの表示がみられました。預貯金についてイメージが湧かない生徒もいたことから、物価の上昇に関する新聞記事を紹介し、預貯金の大切さを伝えました。

授業の最後に、「今、家計管理を失敗したかもしれないが、大人になって現実で失敗すると理想の生活ができなくなる。中学生だから進路や職業を選択して将来の自分の生活を自分で創ることができる。自分らしい生き方とは何か考えよう」と伝え、授業の振り返りを書かせました。「見通しをもって貯金をする」「収入を増やして理想を実現したい」など、自分らしい生き方を考えるきっかけとなったようでした。

(2) 修学旅行での金銭管理

家庭科の授業で販売方法、支払方法についての学習をした後、今までの学びを生かして、修学

写真 タブレット端末に入力する生徒



旅行のお小遣いの計画を立てました。「カチューシャ高いけど欲しい」「おそろい買って写真撮ろうよ」「時間節約でファストパス買う?」「昼ごはんだけじゃなくってポップコーン食べたい」と、自分にとって幸せなお金の使い方に意見が飛び交いました。前時の家計管理の授業の学びを生かして、予備費を設ける生徒もいました。

修学旅行の夜に、実際に使用した項目や金額を記録させました。「友達に合わせてカチューシャを買ったが要らなかった」「欲しいものを優先して買ったから満足」「きっちり計画を立てすぎた、余裕が必要」と、自分の消費生活への考えや傾向が分かったようでした。

将来の理想の生活のために

授業では多くの生徒が失敗したり、理想とは違う結果になったりしました。この失敗や気づきを学校で経験することが消費者としての自覚を高め、自立した消費者を育てるのではないのでしょうか。まずは大人が抱える生活の失敗や葛藤、そして社会の問題に教員が関心を持ち、それらを生徒につないでいくことが、現在および将来の消費生活を主体的に創造する生徒を育てることにつながるようになりました。

ローンのしくみ、インターネットによる契約、最近増えている消費者トラブルなど、生徒が知りたい、学びたいと感じたことをすべて授業で実践したいと思います。そして、将来の理想の消費生活を実現してほしいです。